

日
高
名
所

安政四年三月孟夏

曰高名所

佐羅惠千之丞

日高 名所 記

今爰に思立春霞 室の郡の温さ日高 境を袖摺岩
 □底の□に塵が濱 御代も動かぬ岩代の 千歳の
 縁と結び松 足も達者にまめ坂や 上野の里と打
 ら過ぎて 塩屋の茶やに休て 名所古迹を一見せ
 んと 和田松原を見て行けば 磯打浪のおのれの
 み 群入る鴉真帆片帆 西山寺の地藏尊 麓に見
 へし志賀の里 山路と越て三尾のうら 龍王宮へ
 参詣し 三崎の邊と磯つたい 蟹の貝取る田杭
 浦過ぎて 初湯比井立越えて 鯨を爰で津久野う
 ら 小浦小杭柏村 春の眺を櫻しま 白雲山に煙
 嶋 爰も名所有りしまと 跡に残して横濱を 奥
 に我々たる炭山に 其名も高き興國寺 法燈國師
 の開基也 關南一の禪林と 額に寺号と 耀し
 原谷村の切ぬきの嶺のあらし寒からで 池田大師
 と伏拜み 朝日に照るる東光寺 荊木 萩原 一^x

×萩原八幡社の附近に一里松ありたり

里松 富安村の地蔵尊 大師に足を切られたり

×××

王子の社土橋を 轟々と打渡り 愛徳山と申

トフロトフロ

××足切地蔵 ××田藤次王子社

せしは 聖護院宮様の御祈念ありし靈地也 八幡

宮の森の馬手 海女の王子へ 黒髪の願を結ぶ小

娘の見せしめなりと 清姫の蛇塚を爰に残しけり

夫れより名にあふ階と 六拾式段に踏分けて

白眼立らたる二王門 寺内に残る鐘樓跡 是ぞ清

姫安珍に念力届き朽果しは 今に入相に花に障り

ぬ 道成寺の鐘なき謂れ斯やらむ 扱本堂を礼拜

す 耳をつらぬく御縁起は 遠國波濤の順礼の眼

に浮む泪なり 裏門口へ立出て 東の方を見上れ

ば 霞の中に高山寺 雲を帯びたる山の腰 月に

琢る玉置の城 昔に替る淋しさは 谷の戸叩く

水鶏鳥哀れなりけり 夢の世と心細くも會下の谷

直春公木像を拜せんものと鳳生寺 藤浪立ちし池

の面 蛙の声もものすごし 峯に峙だつ愛宕山

弓手の方を眺むれば 湯の香残せし丸山の躑躅

は今と花盛り 遊山となりし城の跡 入山里を見
渡せば 日も早や西に傾きて 煙滿ら来る小松原
しまむら 御坊 天田川 人の姿も朧月 またの
飛脚と申残し参らせ候 目出度 かしこ

日高 名所 終

巳 孟夏 寫之者也

毛筆の寫本なれども読み易し ページ数も少なく 直ぐ入力
終わる 著者についてや何処から入手し 何時寫したか一切
記載なし

平成十六（二〇〇四）年十一月十一日

清水 章 博